

研究テーマ： 基礎、基本の定着から身近なことを英語で表現する力を育てる工夫

所属 安田町立中山中学校

氏名 入野 由美

R G J H 5

1 研究の背景

本校は、国道より山間へ約5キロメートル入ったところにあり、自然環境が豊かで、全校生徒16名の小規模校である。現在の3年生は、1年生の時から担当しており、英語の授業では学力差はあるものの全員個性豊かで伸び伸びとした活気ある授業が展開される。ALTとの授業も週1時間あり、言語活動やゲームにも積極的である。ただ会話をする場面で、あらかじめ考えていた答えは言えるが、急に話しかけられると簡単なことにも答えられない、戸惑ってしまうという場面がよくある。また一言の返事で終わってしまい会話が続かないということも多い。事前にとったアンケートでも、「話せるようになりたい」と書いた生徒は多かったが、知っているはずの初歩的な英語が使えないし、既習の文が理解、定着できていない。そこで英語で身近なことを表現することができるようになるにはどのようにすればよいか、基礎・基本の定着を目指した活動で理解した表現を、自己表現する時に使えるようにするにはどうすればよいかを探りたい。

2. リサーチクエスト

基礎、基本の定着を目指した活動をどのように発展させていけば、生徒が身近なことを表現することができ、かつその内容について書くことができるか。

3. 予備調査

予備調査1 授業観察の結果

- (1) ペアやグループでの活動には非常に積極的に取り組むことができ、会話活動にも積極的である。話したい、自己表現文を書きたいという思いはあるものの応用力が身につけていないため、主体的なコミュニケーション活動に至らない。
- (2) 英文を書くことにおいては、主語や動詞の語順が不正確であったり、前置詞の位置の誤り、欠落、時間や場所を表したりする句の位置の誤りが多い。
- (3) 音読や言語活動への意欲はあるものの、進んでALTに話しかけ、質問したり何かを知ろうとする態度はあまり見られない。

予備調査2 生徒の英語学習意識

自己表現において、英語を「話すこと」と「書くこと」とともに生徒が苦手意識を持っており、また付けたい力としてもあげている。英語での質問を理解し英語で正確に答えることができるようになりたい、書きたい、けれども必要な単語や表現が出てこない、綴りがわからないので書けないといったことも見られた。

予備調査3 英語力を示すデータ

学力テストによる比較 習熟度診断テスト（新学社）CRT検査結果

4. 仮説の設定

- 仮説1 授業の冒頭で毎時間行っている単語、文のディクテーションは大変有効なので継続することにより語順の認識に役立ち、文を書くことへの抵抗が少なくなるだろう。
- 仮説2 音読活動の時間を増やし、英語をすらすらと読めるようになることが、「聞くこと」や「話すこと」の活動に結びついてくるだろう。
- 仮説3 基本的な質問や答えを使って、ペアや集団のコミュニケーション活動を増やすことで、英語での表現力が定着してくるだろう。

仮説 4 新出文型既習後に、自己表現文を書く機会を授業の中や家庭学習の中で必ず設けていけば生徒達の書くことにおける表現力が付いてくるだろう。

5. 計画の実践

- 1) 単語力、基本文の定着のため毎時間（単語 5、文 3、1 文は日本語を英訳）ディクテーションを行った。綴り、音声面の情報も一緒に復習できる点が良い。
- 2) 単語、目標文、本文の正確かつ大きな声を出しての発音の反復練習。シャドーイング、教科書の読み練習、集団、個人、ペア、ロールプレイ、早読みリーディングテスト（自己評価、相互評価）。
- 3) 授業初めのウォーミングアップで、ペアで英語の簡単な受け答えをさせ、話したり、聞いたりする活動に慣れさせる。

A L T との授業の時は、全員 A L T と数回会話ができるように計画しておく。

A L T からの質問、A L T への質問、自己表現文発表。

（基本文を用いたインタビューゲーム）ワークシートのチェック（英語での説明）

- 4) ノートやワークシートを使用して、新出文型を基に単語（主語、動詞、副詞等）を変化させて多くの文を表現する。英文の一部を自分の立場に置き換えて英作文をする。自己紹介文では、（テーマを与えてのオリジナル文）家族や友人の紹介を英文で表現する等を行った。（お互いに聞きメモ等を取り、再度英語で答える。）

6. 実践の結果

- 1) 単語においては 5 問確実に正解するという姿勢ができ、文においても 1 回で聞き取ろうとする集中力、最後まで書き取ろうとする前向きな姿勢が出てきた。
- 2) 英語を声を出して元気よく発音する、音読することについては、発音、強弱、区切りまた感情移入しての読みを意識し、一定の成果ができていていると思う。けれども応用的な文を正確に話す。書くことについては、まだまだ自信がもてない状態にもある。
- 3) A L T との会話では、問いかけに一言だけ答えて終わりにならないよう、もう 1 文付け加えるか相手にも問い返すルールにしたが、まだまだ話す表現となると初歩的な文法のミスが多い。日常と少し違う内容で取り組んできた A L T との授業であるが、その日の目標を定めたうえで前向きに学習しようとする生徒たちの姿が見えてきた。
- 4) 文法的な正確さには欠けるものの、自分自身の文を書いてみようという意欲はある。家庭学習の内容に工夫があり、生徒自身が納得できる方法で文を自主的に書き学習することができつつある。

7. 結果の検証（生徒の授業を振り返ってのアンケート結果から）

（ディクテーション） 単語を正確に書く。意味がわかる。

（音読） 未習の単語でも音読しようとする意欲。音読が気持ちいい。

（ウォーミングアップ） 最初は苦痛だが、慣れるとともに受け答えがスムーズになった。

（自己表現文） 日記を書く、オリジナル文を作る等の工夫ができ始めた。

8. 成果と課題

試行錯誤しつつの今回の取組であるが、現時点ではまだ具体的に目に見える結果は得られず、生徒が変わったかという自信をもって答えられない。けれども、できる限りの努力を積み重ねていくことにより、少しずつ英語らしい文を書ける生徒が増えてきた。何より前向きに取り組もうとする姿勢、意欲が見られつつあることはうれしい。自分自身この取組を通して、授業改善のための教師の積極的な工夫と向上心、生徒に自信をつける家庭学習の大切さを再確認した。何かを行ったからすぐ成果にあらわれるというものではないだけに、日々の継続した活動を大切にしなければならないし、今後とも生徒のニーズにあった授業や、生徒と共に創造していく授業を心がけたい。